

氏名	なが つかず ふみ 長 津 一 史
学位(専攻分野)	博士 (地域研究)
学位記番号	論地博第1号
学位授与の日付	平成17年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	マレーシア・サバ州における海サマ人の国家経験とイスラーム化

論文調査委員 (主査) 教授 杉島敬志 教授 足立 明 教授 玉田芳史

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、マレーシア、サバ州センポルナ郡に居住する海サマ人のイスラーム化の過程を、マレーシアにおけるイスラームの制度化（イスラームの国家制度への体系的組み込みと国家による管理）が進行していく過程との関連において記述・分析することを目的としている。

まず序章では、イスラーム復興の動きが村落社会や行政組織の末端部にまで波及する過程や、そこに暮らす人々の社会生活や宗教実践をどのように変化させてきたかについて大きな関心が向けられなかった東南アジアにおけるイスラーム研究の現状が概観される。そして、学史的な観点から本論文の目的が定位される。

序章につづく11の章は2つの部に区分され、第1部は3つの章から成る。まず第1章では海サマ人に関する先行研究が検討され、その大半が海サマ人を歴史的变化に乏しい「孤立した海のジブシー」のイメージを再生産するものであったという本質主義批判が展開される。その後の2つの章は、このイメージに対する文献史料にもとづく批判であり、「アッラーに崇められた民」としてスルー王国（スルー諸島のイスラーム王権国家）の最底辺に置かれていた海サマ人が、20世紀初頭、イギリス北ボルネオ会社の支配領域に組み込まれることでスルー王国から遠隔化され、経済的利益を求めて密貿易と越境移動を活性化させていった過程が描きだされる。

第2部は8つの章から成る。第4章ではマレーシア半島部においてイスラームの制度化が進行する過程が記述され、第5章と第6章ではサバ州におけるイスラームの制度化とともに、それがマレーシア半島部をモデルとし、かつ連邦政府や半島部出身の宗教指導者の支援をえることで達成されたものであったことがのべられる。この3つの章における論述は、第9章以降で記述される海サマ人のイスラーム化の背景の状況を明らかにすることを目的としている。

第7章では現在のセンポルナ郡の前身をなす地域に焦点をあて、この地域が北ボルネオ会社の支配領域に組み込まれることで、その内部ではスルー王国の支配構造が次第に無化されていった過程がのべられる。つづく第8章では、著者が1997年3月から約2年におよぶ臨地調査をおこなったセンポルナ郡のカッロン村の政治的、経済的、社会的な諸側面が歴史的な視点から記述される。

第9章では、第4章～第6章で記述されたイスラームの制度化と関連づけながら、海サマ人のイスラーム化の過程が詳述される。すなわち、イスラーム化が進行する中でスルー諸島出身者にかわり半島部出身の宗教指導者が正統なイスラーム知識の担い手となっていったこと、それにともなって、海サマ人が「アッラーに崇められた」被差別民としての境遇を脱する状況が成立したこと、そして、海サマ人の宗教指導者を中心に自らを積極的にイスラーム化し、敬虔なムスリムと見なされるにいたった過程等が克明に記述される。そして、第10章では、その過程で生じた海サマ人の儀礼の変化を取り上げ、イスラーム化にともなって海サマ人の宗教実践が具体的にどのように変化してきたかが明らかにされる。カッロン村の海サマ人たちは霊媒が重要な役割を果たす従来の儀礼を遠ざけ、イスラーム的に正しいと認知された外来の儀礼を遂行するように変化してきた。しかし、イスラーム的に正しいとされる儀礼においても、その細部には従来の儀礼が持続的に遂行されているようにも解釈できる要素がふくまれており、その意味で極めて多声的な状況にあることが指摘される。

最終の第11章では、以上でのべたような記述と分析に基づき、かつ序章で提示された問題設定に立ち返り、村落社会や末端近くの行政単位におけるイスラーム化を理解するにはイスラームの制度化が進展した近年の状況だけでなく、地域の歴史的コンテクストを広く視野に入れる必要のあることが確認される。

論文審査の結果の要旨

東南アジアにおけるイスラームの復興をめぐる近年の研究では、それが国家体制とどのように関係しているかを把握することの重要性が認識されてきた。しかし、この接続関係に着目した研究が一定の成果をおさめる一方で、イスラーム復興の動きが村落社会や行政組織の末端部にまで波及する過程や、そこに暮らす人々の社会生活や宗教実践をどのように変化させてきたかについて大きな関心が向けられることはなかった。マレーシアでは1970年代から「イスラームの制度化」（イスラームの国家制度への体系的組み込みと国家による管理）が「新経済政策」とともに強力に推し進められ、その進展は行政単位の末端部にいたるまで様々な影響をおよぼしてきた。だが、この事態を村落社会に住む人々がいかに経験し、それにどのように応答してきたかについては、わずかな研究が散見されるだけである。

このような学史的背景のもとで、本論文の学問的貢献として次の4点をあげることができる。

- 1) 本論文は、マレーシアのサバ州センボルナ郡でおこなわれた長期の臨地調査だけでなく、マレーシア、シンガポールの公文書館、図書館における文献調査にもとづいて書かれており、国家レベルのマクロな状況を見失うことなく、イスラームの制度化があらゆるレベルの行政組織や社会生活に浸透していく過程を精細に描き出している。
- 2) イスラームの制度化が進行するなかで海サマ人たちが敬虔なムスリムとしての社会的認知をめざして展開していった諸活動が、海サマ人宗教指導者たちの多声的状况に言及しながら記述されており、民族誌として十分な完成度に達している。
- 3) この民族誌的記述は、センボルナ郡がスルー王国（スルー諸島のイスラーム王権国家）の支配下にあった前植民地期をふくむ歴史的パースペクティブのなかで展開されており、海サマ人のイスラーム化を適切に理解するには、イスラームの制度化が進展した近年の状況だけでなく、地域の歴史的コンテクストを広く視野に入れる必要のあることを史料の緻密な分析をとおして説得的に論じている。
- 4) イスラーム化の過程で海サマ人たちは霊媒が重要な役割を果たす在来の儀礼を遠ざけ、宗教指導者がイスラーム的に正しいと認めた儀礼を遂行するように変化してきた。だが、本論文では、儀礼の体系的な記述と分析をとおして、イスラーム的正しさを保証された儀礼であっても、そこには解釈しだいで在来の儀礼の持続的遂行を可能にする要素が含まれていることが明らかにされる。この分析は「意味」概念の使用を抑制し、歴史研究への傾斜を強める儀礼研究の新たな展開に理論的に寄与する可能性をもっている。

以上でのべたことから明らかなように、本論文は、近年の研究では等閑視されてきたイスラーム復興の動きが村落社会や行政組織の末端部におよぼす変化の過程を扱っている点で、大きな学問的貢献を果たしている。また、本論文は、地域の歴史的コンテクストを重視する微史的アプローチの有効性を端的に例示しており、イスラーム復興に関わる研究が今後とるべきひとつの方向を明確に示している点でも高く評価できる。そして、本論文で展開された儀礼の体系的分析は、理論的錬成にやや欠けるところはあるが、歴史的アプローチにもとづく儀礼研究の新たな展開に貴重なデータを提供するものといえる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年4月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。